

## 中学歴史学習の入り口として取り組む河川教育

－河川（暗渠）に歴史を探る－

### River education as an introduction to junior high school history studies

－Exploring the history of rivers (culverts)－

片山健介

逗子開成中学校・高等学校

KATAYAMA KENSUKE

Zushikaisei Junior and Senior High School

本報告は、勤務校における地理学習と歴史学習の接続を念頭に、歴史学習への導入として試みた課題実践の紹介である。学習者自身が河川（暗渠）に歴史を探る体験を通じて、調査手法の基本を学び、身近に存在している河川そのものに気づくことを目的とした。学習者は、近代史を学ぶ直前に、河川のもつ重層的な歴史の一端に気づくことで、自然と人間の関係史と向き合う機会を得た。

#### 1. はじめに一実践の背景－

2024 年刊行の『河川・水の学び』は、幼児教育から小学校教育までの接続を念頭に、「流域」や「水循環」という見方・捉え方を学ぶことで、全体を一つのシステムとして捉える思考の有用性を提示している。特に、現行の小学校学習指導要領解説（総則編）に示される「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実践しうるテーマとしての提案は、今後の河川教育において、教育課程の柔軟化が議論されている現状と相まって、大きな指針になっていくと思われる。

一方、筆者の関心から同書の課題の一つに言及すると、表紙に「子どもの発達段階に応じて」という一文があることをふまえると、中学校・高等学校における河川教育についても、小学校との接続をはじめ、中学社会科各教科間の連携等について、その見通しを示していただきたかった。例えば、[同書 p156] には、「幼児教育・初等中等教育における河川・水教育に関わる項目」の表が示されているが、中学校の歴史的分野については、「歴史との対話」という言葉でまとめられ、具体例として「治水の歴史・川での戦い・産業の発展と川など」と示されるにとどまっている。「最終的には大人」([同書, p176]) をも念頭にした、中学校・高等学校との接続は、これからの検討段階にあると思われる。

本報告は、上記課題や中学校・高等学校における人文系の河川教育実践の少なさもふまえ、勤務校においておこなったささやかな試みを紹介するものである。

#### 2. 河川（暗渠）に歴史を探る課題内容

勤務校では、中 1 時に世界地理を、中 2 時に近代以降の歴史を、中 3 時に前近代の歴史と公民を学ぶカリキュラムとなっている。

授業者として、中 1 世界地理と中 2 近現代史の接続を学習者に意識させる課題の必要性を感じたため、本課題実践を行った。学習者への課題は、身近な地域にある河川（運河・水路を含む）の歴史を探るという内容である。河川を歩くための参考文献や具体的な「暗渠」事例を学習者に紹介した上で、国土地理院地図、今昔マップ、ジャパナレッジスクールを活用した辞典類の記述（場合によって書籍）、現地調査で得た情報の活用を必須とした上で、学習者自身の視点で、自身が調査した河川に関する見所案内文の執筆を課題とした。テンプレートをオンライン上で配付し、それを書き換えることで、提出する形式をとった。

なお、学習者へ配付した課題文冒頭には、「近現代」という時代の中で開発されてきた「河川」を意識させる文言を挿入し、実際に調べることになる「河川」の歴史が、学習者にとって近い時代

の調査になることを誘導した。

また、博学連携も意識し、課題取り組み期間に、企画展「運河で生きる ～都市を支えた横浜の運河～」を開催中であった横浜都市発展記念館の見学を推薦した。同館を訪問した上で、同館近辺を歩くと、横浜の近現代以降の河川や運河の歴史を調査しやすいことも紹介した。

現行の中学校学習指導要領解説では、地理的分野「2 内容」「C 日本の様々な地域」「(1) 地域調査の手法」において、歴史的分野「2 内容」「A 歴史との対話」「(2) 身近な地域の歴史」において、それぞれ「課題」を「追究」する活動を通じて「多面的・多角的に考察し、表現すること」が求められている。本課題を、地域調査として位置づけた。

### 3. 成果

学習者側の成果として、主に以下の3点をあげることができる。

- ・身近にある河川（暗渠）の歴史を掘り起こす（身近な歴史に気づく）機会を得ることができた。
- ・資料収集の方法を学ぶことができた。
- ・河川を含む景観が、人間との関わりの中で形成されてきたことを学ぶことができた。

授業者としては、学習者が、身近にある地域の歴史に寄り添うことから歴史学習をスタートすることができた点に意義を見出している。

加えて、学習者が調査した河川（暗渠）に歴史を探った紹介文や各写真は、地域社会の中に位置づけてみると、貴重な記録になっていると思われる。すなわち、地域社会の中で、体系的に「後世に残す」視点で、小さな河川にかかる橋や暗渠を記録している地域は、数少ないと思われるからである。

収集できた事例は、家の近所の河川、暗渠、現在かかる橋にとどまらない。参考までに学習者が収集した事例を以下に列記しておく。

- ・河川の名残として道路に埋め込まれた橋の欄干
- ・バス停にのみ残された橋名
- ・過去に機能していた取水口の名残
- ・中学校の門柱として再利用された橋
- ・河川があったことを示す広場のモニュメント
- ・片方しかない橋
- ・海岸に残る昔の川の跡
- ・陶板レリーフ橋の詩
- ・330mもある左岸用水の掛樋

### ・道路と交錯する謎の石段

など多彩であった。今ある河川や失われた河川（暗渠）の一地点に着目することで、地理的な景観を考え、歴史的な景観を考える、またとない教材になることを示すことができたと思われる。そして自分なりの言葉で調査内容を表現する課題となった。

近年、歴史教育の側から、文化財としての指定や登録を受けていない「未文化財」という用語を使って、より広範な視点から文化財の重要性を提起する提案がある。本課題の成果物で紹介される河川にゆかりのあるモノに接してみると、河川教育においても大いに活用できる考え方のように思われた。口頭発表時には具体的な事例とともに紹介したい。

### 4. おわりにー実践の課題ー

本課題提出とあわせておこなったアンケート等では、課題も明らかになった。例えば、小学校時代の河川教育体験有無への配慮、地理学習・歴史学習双方との接続、河川（暗渠）にある歴史を見出した後の、探究の深まり等に課題があった。

また、横浜都市発展記念館では、願ってもないタイミングで運河に関する企画展が開催されていたにも関わらず、展示紹介にとどまってしまった。もう一工夫のアドバイスがあれば、より良い課題になったのではないかと考えている。

### 5. 参考文献

公益財団法人河川財団（2024），『河川・水の学び 生きる力をのばす教育』，教育出版，182p.

本田創（2023），『東京暗渠学 改訂版』，実業之日本社，255p.

藤野敦（2023），「記念講演資料」，『令和5年度河川教育研究交流会』配付資料，pp1-12.

會田康範ほか（2022），『文化財が語る 日本の歴史』，雄山閣，218p.

陣内秀信ほか（2022），『東京水辺散歩』，技術評論社，239p.

文部科学省（2018），「中学校学習指導要領解説 社会編」，東洋館出版社，237p.

## 水辺の小さな自然再生に取り組む岩本川における小学校の授業

### Elementary school classes at Iwamoto River, which is engaged Collaborative Nature Restoration

山本大輔<sup>1</sup>, 吉橋久美子<sup>1</sup>, 小野内康伊<sup>2</sup>

豊田市矢作川研究所<sup>1</sup>, 岩本川創遊会<sup>2</sup>

YAMAMOTO Daisuke<sup>1</sup>, YOSHIHASHI Kumiko<sup>1</sup>, ONOUCHI Yasui<sup>2</sup>

Toyota Yahagi River Institute<sup>1</sup>, Iwamotogawa souyuukai<sup>2</sup>

概要：土砂堆積と植生繁茂により人を寄せ付けなかった岩本川は、地域住民と行政の取組で子どもが遊べる川となり、近くの小学校に活用されるようになった。岩本川は生活科や総合的な学習の時間を中心に、国語、図工等の様々な教科や学芸会の題材として活用された。近年では子どもたちによる岩本川の小さな自然再生も行われている。身近な川で遊ぶ機会が少ない中、小学校の授業で川と触れ合うことは貴重な自然体験の機会だと考えられる。

#### 1. はじめに

近年各地で、小さな自然再生が行われている。小さな自然再生とは、日曜大工感覚で手軽に取り組める手づくり型の自然再生であり、自己調達できる資金規模であること、多様な主体による参画と協働が可能であること、そして修復と撤去が容易であることの3つの条件を満たすものと整理されている（水辺の小さな自然再生ホームページ）。

愛知県豊田市を流れる岩本川では、地域住民と行政の共働による「ふるさとの川づくり事業」として、水辺の小さな自然再生が行われている。

2015年度の事業開始前には、土砂堆積とヨシの繁茂が著しく、人を寄せ付けない場所であった岩本川は、浚渫や水制工といった行政による河川改修と地域住民（岩本川創遊会）による継続的な草刈りや水の流れを変化させる石組み等により、現在でも子どもが遊べる川として維持されている。

遊べる川になった岩本川を活用してもらうため、2016年度に近くの平井小学校の教員やPTAに対して、岩本川を紹介し、授業を行う際には岩本川創遊会と矢作川研究所がサポートできること等を説明した。その結果、2017年度に5年生が授業で岩本川を訪れたのを皮切りに、毎年川学習が行われるようになった。今回の発表では、岩本川を活用した平井小学校の授業について報告する。

#### 2. 平井小学校による岩本川での授業

2017年度から2024年度まで、平井小学校の1, 2, 4, 5, 6年生が岩本川で授業を行った。

##### (1) 岩本川づくしだった2年生

2018年度の小学2年生は、1年間を通じて様々な授業において岩本川を活用した。6月に「初めての川学習」として、岩本川創遊会と豊田市矢作川研究所そして保護者のサポートを受け、岩本川の中を歩いたり、ガサガサ（タモ網で水生生物を捕まえること）をしたりした（図1）。この日に捕まえた生き物は学校に持ち帰り、廊下の水槽で飼育、観察に用いられた。川の形や見つけた生き物



図1 岩本川での川学習の様子



図2 2年生が作成した岩本川の地図

を描いた岩本川の地図を作成し、廊下に掲示した(図2)。また、作文の授業で岩本川をテーマにしたり、捕まえた生き物の名前を英語で学んだりもした。

また、彼らは6月に体験した岩本川の様子や学んだことを、7月に1年生へ、9月に保護者へ説明した。その後、9月に2年生と1年生がグループになって、岩本川の探検やガサガサを行った。この他に、デザインの授業として、岩本川の生き物によるお月見をテーマにカラー版画を作成したり、岩本川で体験したことや地域の伝承をもとに「岩本川様と川坊主」というオリジナル劇をつくり、学芸会で発表したりした。

さらに、「川の流れ」を体感するため、紙皿や牛乳パック等で舟を自作し、川を流れていく動きを観察した。3月には、地域ボランティアの指導で作った折り紙の雛人形に各々の願いを託して、改良した舟に乗せ、流し雛を行った。

そして、ひとりひとりが春夏秋冬の岩本川での出来事を岩本川ブックという一冊の本にまとめ、岩本川づくしの一年間を終えた。

## (2) コロナ禍の6年生の思い出づくり

2020年度は新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言の中で始まり、小学校最後の思い出をつくることのできるはずだった6年生は、校外学習、プール、修学旅行等の様々な活動の中止が余儀なくされた。そのような中で実施した、岩本川の自然再生を体験する授業では、マスク越しでも分かるほど子どもたちは楽しそうな様子であり、教員にもとても喜ばれた。



図3 4年生による水辺の小さな自然再生

## (3) 4年生が小さな自然再生に挑戦

2022年度以降は、4年生が総合的な学習の時間で、地域の課題解決のため、岩本川での小さな自然再生を行っている。岩本川創遊会から困っていることを聞き、解決策を考えて、実践するという流れで進められていて、厚く堆積した土砂をスコップで切り崩したり、水衝部への水の流れを弱めるため置き石をしたりといった活動が行われた(図3)。

## 3. おわりに

遊べるようになった岩本川は、近くの平井小学校の授業で活用されるようになった。これまでに、いろいろな学年や教科で岩本川を題材にした授業が行われたことから、川が活用できる状態にあれば、身近な地域資源として様々な教育に活用できると考えられた。

また、近年は保護者が川を危険視していることや子どもが習い事等で忙しい等の理由で、親子で身近な川で遊ぶ機会が少ないため、小学校の授業で川と触れ合うことは貴重な自然体験の機会だと考えられる。

## 4. 参考文献

水辺の小さな自然再生研究会ホームページ：水辺の小さな自然再生とは？  
<http://www.collabo-river.jp/> [2025年9月22日閲覧]

子どもと地域をつなぐ河川教育の実践  
ー創造性を育む授業デザインー

Connecting Children and Community Through River Education  
Lesson Design Developing Creativity of Children

川崎公美子<sup>1</sup>，半田優子<sup>2</sup>，荻原彰<sup>3</sup>，吉田俊介<sup>4</sup>，多田泰紘<sup>5</sup>，伊藤祐希<sup>6</sup>，村上幹夫<sup>7</sup>  
同志社小学校<sup>1, 2</sup>，京都橘大学<sup>3, 4, 5, 6</sup>，元京都市立小学校<sup>7</sup>  
KAWASAKI Kumiko<sup>1</sup>，HANDA Yuko<sup>2</sup>，OGIHARA Akira<sup>3</sup>，YOSHIDA Shunsuke<sup>4</sup>，  
TADA Yasuhiro<sup>5</sup>，ITO Yuki<sup>6</sup>，MURAKAMI Mikio<sup>7</sup>

Doshisha Elementary School<sup>1, 2</sup>，Kyoto Tachibana University<sup>3, 4, 5, 6</sup>，Formerly at Kyoto City Elementary School<sup>7</sup>

概要：知識や技能を記号として記憶するのではなく、身体的な感覚を伴った深い理解による記号接地を目指すために、学校のすぐ側に流れる岩倉川での活動を活用した理科の授業実践を行った。身近な河川を教材とした理科の学習によって、地域の自然環境に関心をもち、自然の生き物と共に生きる社会を目指す使命感が芽生えた。これによって、河川教育を受けた子ども達が探究活動を展開し、自らの考えを地域社会へ発信しようとするエネルギーを生んだ。

1. はじめに

小学校教育において ICT の活用が進められ、様々な情報の活用が可能となり、効率的でわかりやすい授業が増えた。しかし、生成 AI の普及によって、子ども達は新たな資質・能力を身に付けなければならないとなった。その1つとして、自ら問いを発見し、創造性を働かせながら探究する力の育成が求められている。

川での活動では、を通して、変化に富んだ水流や予測不可能な川底の凹凸に対応するため、子ども達は様々な感覚機能を活用して全身のバランスを保たなければならない。さらに、生き物を捉えようとする、生き物の動きを予測したり、棲み処となる場所について仮説を立てたりしなければならない。このように、目的意識をもって問いや仮説を立て、試行錯誤を繰り返しながら解決方法を探る体験が自然に生まれる場として、川は高い教材価値があるといえるだろう。さらに、実際に触れることにより、生き物や自然環境を守ろうとする使命感が芽生えることが期待できる。

そこで、川での活動を軸とした授業を計画し、そこから生まれた気づきから地域の自然環境を守る活動を展開する取り組みを実施した。

2. 川での体験を軸とした授業デザイン

岩倉川は校舎のすぐ西側に流れており、運動場の端にサワガニやアカハライモリが迷い込むほど、自然の生き物の存在を身近に感じることが出来る。けれども、実際に川で生き物を採集して飼育する子どもは少数である。そのため、理科の授業として、すべての子どもが川に入り、水流を体で感じ、自然の生き物に触れる機会を設けてきた。

2024 年度から、このような活動を一步進めて、岩倉川を教材化することによって、子ども達が様々な問題を自分ごととして捉え、自らの考えを地域へ発信する試みを行った。

岩倉川を活用した授業は以下のとおりである。

① 5 年生( )内は川を活用した学習の配当時間

学習単元	岩倉川を活用した具体的な実践
メダカのたんじょう(3/8)	岩倉川で生き物採集・飼育観察し、生き物がくらす環境について考える。
台風と天気の変化(1/7)	・台風や大雨の時の岩倉川の様子から、水害に対する備えについて話し合う。
川の流れと水のはたらき(6/10)	・岩倉川の地形の観察 ・流速や水深の測定、土砂の運搬実験 ・合流地点での水害予測・検証実験 ・岩倉川を守る会の会長より水害の歴史や川を守る活動について学ぶ。



## ② 6年生( )内は川を活用した学習の配当時間

学習単元	岩倉川を活用した具体的な実践
発電のしくみと電気の利用 (4/9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電動自転車用のモーターの水力発電機製作・岩倉川の水流で実験。</li> <li>・水力発電実験の結果から、発電のための動力源や環境負荷、エネルギー効率などについて考察する。</li> <li>・岩倉川イルミネーション設計図づくり</li> </ul>

## 3. 岩倉川の学習から生まれた活動

岩倉川を教材とした授業によって、身近な自然環境を守ろうとする使命感が生まれた。この内的な変化を動力源として、様々な活動を展開した。

- ① 川ごみから展開した活動
  - ・プラスチック包装を使わない商品開発・販売
- ② 地域への発信と交流
  - ・岩倉川清掃活動（月1回）
  - ・左京区ふれあいまつり出展（川ごみと海洋プラスチック問題に関する展示発表・商品販売・ワークショップ）
- ③ 研究発表
  - ・きょうと☆生き物フェス出展（岩倉川の生き物について研究発表とワークショップ）



①商品開発



②研究発表（いきものフェス）

## 4. 岩倉川を利用した学習活動による成果

岩倉川を利用した学習活動で生まれた子ども達の「気づき」や「疑問」を活用した授業展開をすることで、子どもは主体的に学びに向かい、その熱量はすさまじいものであった。川での学習活動は、子ども達の学びのエネルギーを引き出し、探究への情熱を持続させて子ども自身が活動する状態をつくったといえる。

川に入る前は「昆虫も川も汚い」と考えていた子ども達が、実際に川に入ると、恐れが消え、川での活動を積極的に楽しむように変容した。京都橘大学荻原彰教授に依頼した事前事後アンケート調査による形容詞一対比較法による評価では、「岩倉川は面白い」「岩倉川は生き物が多い」「岩倉川の生き物は幸せ」について有意差があった。

5年生「川の流れと水のはたらき」の学習では、水害対策における護岸工事に対して「自然の景観を考えて」「生き物に悪い影響がないように」「アカハライモリやホタルが産卵する植物が生えるよ

うに」という川での活動から生まれた自然環境に配慮した具体的な記述が見られた。実際に京都市の土木事務所に問い合わせると、岩倉川の護岸工事では、景観と動植物の生育環境に配慮した深目地ブロックが使われていることがわかった。教科書の学習だけでは生まれなかった探究の先に、行政の環境対策を知ることでもできて、子ども達と共に私自身も深い納得を得ることができた。

また、6年生「発電のしくみと電気の利用」の学習の最後には、「エネルギーに関する未来への提言」というテーマで意見書を作成した。その中に、河川を利用した小型の水力発電の推進を主張する意見や、原子力発電や火力発電は人間だけでなく自然環境への影響が甚大であることへの心配を主張する記述が多く見られた。

これらのことから、川での活動を軸とした理科の授業展開が、子どもたちの探究心や創造性を掻き立て、自然環境を守る視点に立った意見を社会へ発信する力を育む効果があったと考えられる。

## 5. 今後の課題

岩倉川での活動における子ども達の発見や気づきを取りこぼさずに記録する方法の開発が必要である。その対策として、子どもたちに装着したウェアラブルカメラによる記録とデジタル技術を利用した岩倉川の生きものデジタルマップづくりを始めている。

岩倉川の生き物や自然環境に関する調査結果がウェブ上に蓄積されることによって、長期的な変化についての考察が可能となる。また、卒業後も子ども達が岩倉川の調査研究を続けることができる。さらに、様々な理由で川での活動が困難な子どもも、バーチャルでの生き物調査や実験が可能となる。フィールドワークとデジタル技術を融合することで、子ども達の探究の幅を広げ、創造性を掻き立てる魅力ある学習活動を開発したい。

## 参考文献

- 京都市情報館ホームページ（岩倉川）  
 今井むつみ、秋田喜美(2023),「言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか」中公新書,  
 今井むつみ(2025),「アブダクション推論と記号接地について」,文部科学省教育課程特別企画部会第6回資料

## へき地・小規模校における河川教育の実践化についてⅡ —河川教育を通じて川の生態系・アイヌの人々の暮らしを考える—

—Practical implementation of river education in small remote schools Ⅱ—  
—Thinking about river ecosystems and the lives of the Ainu people through river education—

山内拓也<sup>1</sup> 舘英樹<sup>2</sup>  
本別町立勇足小学校<sup>1</sup> 士幌町立中士幌小学校<sup>2</sup>  
YAMAUCHI Takuya<sup>1</sup> TACHI Hideshige<sup>2</sup>  
Yutari elementary school<sup>1</sup> Nakashihoro elementary school<sup>2</sup>

＜概要＞ 山内・舘（2024）では、へき地・小規模校において、地域の自然を活用し、児童が自然体験をしながら学校で学んだ知識・技能と答えのない日常に存在する問いを結びつける場面を意図的に設定することで「教科等を横断する汎用的スキル」を育む総合的な学習の時間の実践を報告した。本稿では、その後の取り組みと課題を踏まえた取り組みについて報告する。

### 1 はじめに

総合的な学習の時間においては、各教科等で学んだ知識・技能を汎用的に活用できる児童の育成を目指すことが求められている。文部科学省（2021）は、「今、求められる力を高める総合的な学習の時間」の中で、「総合的な学習の時間では、各教科等で習得した概念を実生活の課題解決に活用することを通して、それらが統合され、より一般化されることにより、汎用的に活用できる概念を形成することができる」と指摘しており、実生活と結びつけることが大切であると考え。

しかし、能條（2020）が、「学校で学んだ知識（学校知）が日常の生活体験（日常知）と乖離している」ことを問題提起しており、子供は、各教科等で学んだことを実生活とを結びつけられない現状があると考えられる。そこで総合的な学習の時間において河川学習を取り入れることにより、各教科等で学んだ知識・技能を他の場面でも汎用的に活用できる子供を育成したいと考え実践した。この実践の一部は、山内・舘（2024）により報告した。

### 2 本稿のねらい

山内・舘（2024）で、河川教育の実践を報告したが、実践途中の報告であったことから、実践全体の概要を報告することができなかった。本稿においては、その後2024年度に取り組んだ実践と今年度実践中の河川教育を進める中で子どもたちに教科等を横断する汎用的スキルを育む取り組みを報告する。

### 3 問題の所在と仮説

#### （1）問題の所在

本校は十勝の東北部に位置し、周りを畑に囲まれた農村地域にある、へき地・小規模校である。近くには、利別川が流れており、自然に囲まれた学校である。

実践の計画を立案するにあたり、児童にアンケートをとった結果、「へき地・小規模校で自然がそばにあり、自然を取り入れた活動を奨励しやすい環境にあっても、児童の自然体験は少ない。」ことがわかった。また、日々の見取りから高学年の課題として各教科で学んだ知識・技能を他の場面で汎用的に活用することや、見通しをもつことなどが挙げられた。さらに、実践を進める中で問題設定のあり方に課題が見られた。

#### （2）仮説

こうした課題を解決すべく、へき地・小規模校の特徴を生かしながら、総合的な学習の時間において河川教育を計画し実施している。その際、児童が学校で学んだ知識・技能と答えのない日常に存在する問いを結びつける場面を意図的に設定することで「教科等を横断する汎用的スキル」を育むことができるだろうという仮説を立て進めることとした。また、実践を進める際には、児童がより良い問題設定ができるような時間を設定することに留意した。

### 4 2024年度の実践

2024年度の実践においては、山内・舘（2004）で報告した通り、まず、児童の興味・関心から始まる個人研究を行った。次に、個人研究で学習した知識や教科等で学習した知識を結びつけながら、共同研究に取り組んだ。テーマは、5年生は「川の生態系」とし、6年生は「アイヌ民族と河川」とした。

5年生は、川の生態系について調べるために利別川から調査範囲を拡張し、十勝川など北海道にある河川について調査した。個人研究で生き物を調査した経験を生かし、十勝川等にいる生き物を調べ整理した。個人研究で、問題設定に課題が見られたことから、調べたことを仲間と共有し、気づいたことや疑問に思ったことについて対話を通じて整理することで仲間とともに問

題を考え、精査する時間を設けた。また、生き物について調べていく中で児童は河川の災害や防災、治水も生態系に関わることに気づき取り組み等を調査した

6年生は、町歴史民族資料館に見学に行った際、資料からアイヌ民族と河川にはつながりがあることに気づいた。資料は、図1に示した。

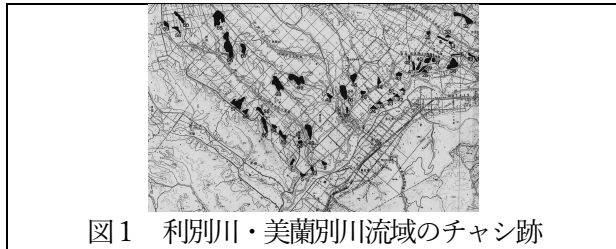


図1 利別川・美蘭別川流域のチャシ跡

図1に示した「利別川・美蘭別川流域のチャシ跡」をみて、児童は、河川沿いにチャシ跡があることに気づくことができた。その気づきに基づいて、より良い問題づくりのために、2つの場面を設定した。一つは、現代の我々の生活とアイヌ民族の生活を仲間とともに比較し問題を見いだす時間、もう一つは国立アイヌ博物館の学芸員を講師に招き、衣食住に関わって概論を講話いただく時間である。児童が見いだした問題は、図2に示した。

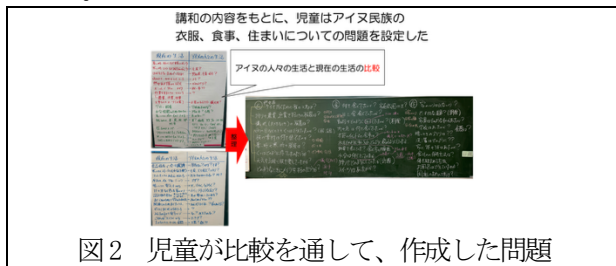


図2 児童が比較を通して、作成した問題

図2に示した通り、児童は、現代の我々の生活とアイヌ民族の生活を衣食住に分けて考えることにより、多様な気づきが生まれた。その気づきと、専門的な知識を関連づけることにより問題を精査することができた。児童から出された問題を抽象化し、大きく衣食住に分けて体験的に研究を進めることとした。

児童が調査を進める中で、衣食住には河川が大きく関わっており、中でも鮭はアイヌ民族の生活にとって大きな役割を担っていることを見出した。そこで、管内のさけ・ます孵化場から鮭10匹を入手し、学習を進めることとした。

衣の体験では、鮭の皮を用いて、「鮭の皮靴」を作成した。皮は児童が鮭を捌き、身を丁寧に取り、乾燥させて用意した。その後、家庭科で学習したかがり縫いを用いて靴を完成させた。完成させた靴は、図3に示した。

住の体験では、完成させた鮭の皮の靴を保管したいという児童の願いから、アイヌ民族が使っていた「ブ(倉)」を作成した。児童は算数や図画工作の知識を使い作成を進めていた。

食の体験では、家庭科の知識を使い、皮から取り除いた身を用いてアイヌ民族の伝統的な料理をつくった。

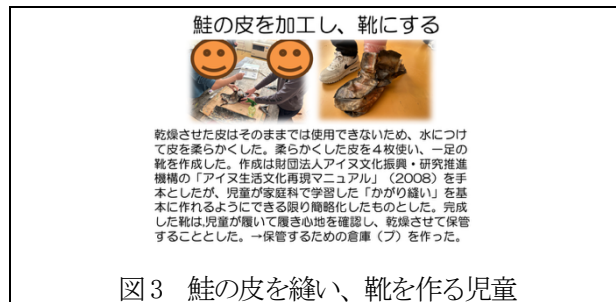


図3 鮭の皮を縫い、靴を作る児童

作った料理名は、「オハウ」であり、鮭の身などを野菜と一緒に似た汁ものである。

### 3 2025 年度の実践

#### (1) 汎用的なスキルを育む効果的な取組

新年度になり、昨年度取り組んだ個人研究の課題を踏まえて、「自然カードづくり」を行った。複式学級のよさとして6年生が前年度の経験を生かし5年生にアドバイスしながら研究を進めていた。自然カードを作るにあたって、児童が校庭や利別川で集めた自然物を観察し、比較を通して分類する活動を取り入れた。教師は児童がこれまでに理科や社会科で取り組んだ比較や分類の考え方をを使って観察し、適切な問題設定に繋げることができるように様々な見方や考え方を明示した。その活動の中から、児童は問いを見出し、関心をもった自然物をカードにしていっていった。

#### (2) 本別川でのフィールドワーク

児童から、利別川以外の川にもフィールドワークに行き、生き物の違い等について調査したい申し出があり、本別川を調査することとした。本別川は本別公園内を流れている川で、その流域には様々な植物があり、クジラの化石などが発見されている。町には長年、本別川を調査されている有識者がおり、その方々に協力していただきながらフィールドワークを進めた。

### 4 おわりに

今回の実践では、体験的な活動と対話的な活動を多く取り入れることにより、児童が適切な問題設定をして、知識と知識をつなげて研究を進めていた。今後の課題は、この実践を持続可能にしていくことにある。地域の方と対話を重ね、人材を含めた資源開発に努めたい。

### 8参考文献

- 能條歩 (2020) 「増補改訂版人と自然をつなぐ教育自然体験教育学入門」NPO 法人北海道自然体験活動サポートセンター
- 文部科学省 (2021) 「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」アイフィス
- 山内拓也・館英樹 (2024) 「へき地・小規模校における河川教育の実践化についてⅡ—河川教育を通じて川の生態系・アイヌの人々の暮らしを考える—」日本河川教育学会第4回福島大会研究発表